

1980年代ロシア SF ファンダムの構造と変動

宮 風 耕 治

はじめに

現代ロシアのSF界においてファンたちの果たす役割は非常に大きなものがあるが、いままで研究の対象とされてきたことはほとんどなかった。

しかし、現代ロシアにおいて各地でSF大会が継続して開催され、それぞれの大会においてすぐれた作品や功績を残した人物等に対して賞を授与するというシステムが維持されていることを考えても、そうした大会を支えるファンの力は相当なものがあると考えなくてはならない。日本やアメリカとは異なり、旧ソ連圏のSF大会は年に一度の全国的な規模の大会が各地持ち回りで開催されるのではなく、各地域のファンたちが基盤となって継続的に大会を開催するという形式が一般的である。主なSF大会としては、アエリータ（エカテリンブルグ）、インタープレスコン（サンクト・ペテルブルグ）、ストラニク（サンクト・ペテルブルグ）、ズヴォズニイ・モスト（ハリコフ）、ロスコン（モスクワ）、ポルタル（キエフ）、ジールアントコン（カザン）などがあり、それぞれの歴史を重ねている。

こうしたSF大会のスポンサーとなる出版社にかつてのSFファンたちの多くが関わっていることも注目すべき点である。特にストラニクを開催するサンクト・ペテルブルグの出版社テラ・ファンタスチカ社は、ボリス・ストルガツキイが主宰する作家セミナーのメンバーであるニコライ・ユータノフが1991年に創立した会社であるが、その後、アンドレイ・チェルトコフやセルゲイ・ベレジノイなどの有力なファンの参加を得てサンクト・ペテルブルグのSF界の中心的存在となり、「第四の波」と呼ばれるロシア・ファンタスチカの新しい潮流を出版の面から担い、ロシアのSF界全体に非常に大きな影響力を持った⁽¹⁾。

一方で、ロシアのSFファンダムの歴史を振り返ると、スヴェルドロフスクにおいてソ連で初めてSF大会「アエリータ」が開催された1981年を画期とし、1980年代にファン活動の爆発的な高揚の時代があったとするのが通説である。1980年代がロシアのSFファンダムにとっての高揚期であったことはファンたちの多くの回想や当時の資料から裏付けられるが、ソ連崩壊後にはかつてのファンたちはファンであり続けることに困難を感じるようにもなったとも言われている⁽²⁾。

-
- 1 ロシアSF史のおおまかな概略については、以下の文献も参照。宮風耕治『ロシア・ファンタスチカ(SF)の旅』東洋書店、2006年。
 - 2 ファンの執筆したロシアのSFファンダムの代表的な概説として、ファンジンを中心に記述したものであるが、以下の文献を参照。Халымбаджа И.Г. Фантастический самиздат // Если. 1998. № 9 [http://www.rusf.ru/esli/rubr/publ/es998hal.htm]. 以下、URLは特記以外2007年10月13日現在有効。

本稿では、1980年代のロシアのSFファンダムを代表する存在であった、ミハイル・ヤクボフスキイとセルゲイ・ビチュツキイというふたりのロストフ・ナ・ドヌー在住のSFファンによる対談の記録「Мы не одни!」を主に取り上げ、1980年代のロシアSFファンダムの構造と、ファンダムがソ連崩壊後の新しい時代に対してどのような変貌を遂げざるをえなかったのかを考察したい。

1. «Мы не одни!» について

テキストの分析に移る前に、対談の当事者についてまとめておく。ヤクボフスキイは1950年生まれのSFファンで、ロストフ・ナ・ドヌーで育った。70年代後半からファン活動を始め、ビチュツキイとともにファンクラブ「引力」«Притяжение»を主宰した。1981年にペルミで開催されたSFファンたちのセミナーに参加し、大きな刺激を受けて各地のSFファンクラブとの交流を始めた。1982年にはロストフ・ナ・ドヌーでヴィリニユスやユジノサハリンスクのファンクラブも参加した大規模なセミナーを開催し、各地のSFファンたちから注目を浴びた。1988年には全ソSFファンクラブ会議«Всесоюзный совет КЛФ»の代議員に選出される。1989年には一種の配本事業である「ファンタスチカ基金」«Фонд фантастики»をビチュツキイとともに立ち上げ、テキスト社などが出版したSF作品を各地のSFファンクラブに配本した。

一方、セルゲイ・ビチュツキイは1963年生まれで、70年代後半からファン活動を始めた。ヤクボフスキイとは年齢にかなり差があり、80年代半ばにはクラブを離れていた時期もあるが、80年代初頭と80年代後半にはヤクボフスキイとともに精力的にファン活動を展開した。

続いて、対談の成立の経緯と性格について整理しておきたい。今回取り上げる«Мы не одни!»は、2001年にヴォルゴグラードで開催されたヴォルガコンというSF大会でおこなわれたヤクボフスキイとビチュツキイの対談の記録である。ときおり、ヴォルガコンの主催者であるボリス・ザヴゴロドニイがコメントをさしはさむが、ほとんどはふたりの対談であり、ロシアSFの総合サイト「ルースカヤ・ファンタスチカ」にアップロードされた。さらに、2003年に多少の補足と訂正が加えられた³⁾。

ふたりの回想の話題の中心はロストフ・ナ・ドヌーの自分たちのファンクラブのことであるため、他の地域の個別の事情については深く立ち入られてはいないが、1980年代に起きたロシアSFファンダムの主要な事件はほとんど網羅されており、80年代のロシアSFファンダムの実態を知るうえで重要な文献である。

この対談はヴォルガコンという舞台と非常に密接な関係がある。ヴォルガコンと聞いてロシアのSFファンたちが思い出すのは、1991年9月6日から13日にかけてヴォルゴグラードで開催されたSF大会のことである。1991年のヴォルガコンは、66の都市から300人以上の参加者を集め、ジェイムズ・ホーガン、テリー・ピッスン、ラリー・マキャフレイ、ク

3 «Мы не одни!»のテキストについては以下のURLを参照。[http://fandom.rusf.ru/klf/klf_020.htm]

リストファー・スタシェフら欧米諸国からのゲストのほか、チェコ、ブルガリア、オーストラリア、日本などのファンや出版関係者も参加した⁽⁴⁾。1989年に開催されたソツツコンも東欧諸国のファンたちが集った大規模なものであったが、欧米諸国からのゲストも大々的に迎えて開催された大衆的なSF大会という意味では1991年のヴォルガコンはソ連史上初のものであった。ソ連国内の当時の新進作家や高名なファンたちも結集した⁽⁵⁾。

1991年のヴォルガコンが歴史的であったとされるのは単に各地から大勢の人物が集まったというだけではなく、このコンヴェンションに参加した作家やファンの多くが1990年代のSFの新しい潮流を指導する人物になっていったからである。たとえば、ヴェレル、ストリャロフ、ロギノフ、ゲヴォルキャン、ウスペンスキイ、シテルン、チャドヴィチ&プライデル、ルキーン夫妻といった「第四の波」と称される運動を担った作家たちもいれば、駆け出しの作家だったクドリャフツェフ、当時はまだファンだったワシリエフ、スキリュク、シチェルバク=ジューコフといったさらにその後の世代を担う人物もいた。ファンについても、1980年代のアエリータを支えたスヴェルドロフスクやペルミなどのファン以外に、シードロヴィチ、チェルトコフ、ベレジノイ、ニコラエフ、ラリオノフといった90年代にサンクト・ペテルブルグでインタープレスコンやストラニクといったコンヴェンションを支える新しい時代のファンたちが集っていた。

この1991年のヴォルガコンを主導したのがヴォルゴグラードのファンであるボリス・ザヴゴロドニイである。ザヴゴロドニイは1950年生まれで、つねに「ソ連のファン番号1番」

4 日本からのヴォルガコン参加者のレポートは以下を参照。大野典宏「WORLD SF REPORT」『SFマガジン』1992年2月号、194-199頁。

5 Приданникова Т. [http://fandom.rusf.ru/convent/95/volgacon_1991_2.htm]. 主な参加者にウラジーミル・ポクロフスキイ、エドゥアルド・ゲヴォルキャン（ともにモスクワ）、スヴァトスラフ・ロギノフ、アンドレイ・ストリャロフ（ともにレニングラード）、ボリス・シテルン、リュドミラ・コジネット（ともにキエフ）、ボリス・ゼレンスキイ、ユーリイ・プライデル、ニコライ・チャドヴィチ、エヴゲーニイ・ドロズド（以上ミンスク）レオニード・クドリャフツェフ、ミハイル・ウスペンスキイ（ともにクラスノヤルスク）、アラン・クパチエフ（ピシケク）、ヴィタリイ・ザビルコ（ドネツク）、ワシーリイ・ゴロワチョフ（ドニエプロペトロフスク）、ゲンナジイ・プラシケヴィチ、アレクサンドル・パチロ（ともにノヴォシビルスク）、レフ・ヴェルシニン（オデッサ）、エヴゲーニイ・フィレンコ、ミハイル・シャラーモフ（ともにペルミ）、セルゲイ・イワノフ（リガ）、アレクサンドル・ボリヌイ（スヴェルドロフスク）、ワシーリイ・ズヴァギンツェフ、イーゴリ・ピドレンコ、エヴゲーニイ・パナスコ（以上スタヴロポリ）、ミハイル・ヴェレル（タリン）、ヴィタリイ・ピシチェンコ（チラスポリ）、イーゴリ・フョードロフ（ヴィンニツァ）ルキーン夫妻、シニャーキン（以上ヴォルゴグラード）らの作家のほか、イーゴリ・ハルィムバッジャ（スヴェルドロフスク）、ユーリイ・ズバキン（チェリャピンスク）、ヴル・ガーコフ（モスクワ）、ボリス・シジュク（キエフ）、ユーリイ・コロバエフ（イワノヴォ）アレクサンドル・ニコラエンコ（チラスポリ）、アンドレイ・サモイロフ（ウファ）、ウラジーミル・ワシリエフ（ニコラエフ）、アンドレイ・シチェルバク=ジューコフ（モスクワ）、ドミートリイ・スキリュク（ペルミ）、セルゲイ・ベレジノイ（セヴァストポリ）、アンドレイ・チェルトコフ、アレクサンドル・シードロヴィチ、アレクサンドル・オレクセンコ、アンドレイ・ニコラエフ（以上レニングラード）、ウラジーミル・ラリオノフ（ソスノーヴィイ・ボール）らのファンや評論家が参加した。なお、1982年4月にゼラズニイ、ホールドマン、「ローカス」誌のチャールズ・ブラウン、フォレスト・アッカーマンがソ連を訪れ、モスクワ、キエフ、レニングラードの各地で作家たちと交流したが、大衆的なイベントではなかった。НФ. Вып. 27. М.: Знание. 1982. С. 232.

«Фэн № 1 Советского Союза» と紹介される伝説的な SF ファンである⁽⁶⁾。工場労働者として働くかたわら、ファンクラブ「時の風」«Ветер времени» を主宰し、ソ連初のファンが選出する組織的な SF 賞であるヴェリーコエ・コリツォ賞を運営した。1985 年にはアメリカの SF 情報誌「ローカス」にソヴィエト SF の現況のレポートを寄稿した。これらの功績に対して、1994 年には「ロシアのファンダムの伝説の人物」として遍歴者賞小賞、2001 年にも再び小賞を受賞している⁽⁷⁾。

しかし、1991 年の歴史的な成功のあと、ヴォルガコンは継続して開催されることはなかった。これは安定したスポンサーを確保することができなかつたためであるが、アエリータも同様の問題にさらされ、1995 年と 1996 年の大会は開催されなかった。アエリータはその後、再び毎年開催されるようになったが、1980 年代のように、ロシア語圏を代表する SF 大会ではなくなった。一方で、サンクト・ペテルブルグのインタープレスコンは 1991 年から現在まで毎年開催されており、長編、中編、短編、評論、イラストレーター、出版社などの各部門ごとに前年のすぐれた作品や業績に対して、大会に参加したファンの投票で選出されるインタープレスコン賞を設け、90 年代以降のロシア SF 界を牽引している。

したがって、1991 年のヴォルガコンは、80 年代のアエリータの時代から 90 年代のインタープレスコンやストラニクといった新しい SF コンヴェンションの時代へといたる過渡期の歴史的な大会として位置づけられるが、当時の盛況ぶりはもちろん期待できないまでもこの 1991 年のヴォルガコンをなつかしみ、10 年ぶりに開催されたのが 2001 年のヴォルガコンである⁽⁸⁾。ヤクボフスキイとビチュツキイの対談にも、こうした時代の推移の感覚が色濃く反映されている。ヤクボフスキイもビチュツキイもともに 70 年代後半から 80 年代を通じて活躍した大物のファンであるが、90 年代にはボリス・ザヴゴロドニイと同様に商業的な出版活動へは移行することができず、ソ連崩壊後の新しい時代の活動には対応することができなかった人物である。

時代からはやや取り残されたという印象もあるこうした古株のファンがかつてのファン活動をどのように回想するのかという点にも注意しながら、テキストの内容へと入っていくこととしたい。

6 ザヴゴロドニイについての紹介の一例は下記 URL を参照。[http://rusf.ru/strannik/biograf/nom_z.html#zavgor]

7 ちなみに、「ローカス」の編集をしていたチャールズ・ブラウンは «американский «Фэн № 1» と紹介される。НФ. Вып. 27 (前注 5 参照)。

8 2001 年のヴォルガコンは 8 月 22 日から 26 日にかけてヴォルゴグラードで開催された。作家としては地元のエヴゲーニイ・ルキーン、セルゲイ・シニャーキンのほか、ユーリイ・ブルキン、セルゲイ・ルキヤネンコ、ワシーリイ・ゴロワチョフ、ニコライ・バソフ、イーゴリ・フォードロフといった人たちの参加が予告されていたが、実際に参加したことが確認されるのはルキーン、シニャーキン、アンドレイ・ラザルチューク、イリーナ・アンドロナチ、ウラジーミル・ワシリエフ、アンドレイ・イズマイロフ、ドミートリイ・スキリュクなどであり、全体の規模も数十人のものであったと思われる。ヴォルガコンの予告については下記を参照。День за днём. Волгоград. 10-16.8.2007. С. 2 [http://fandom.rusf.ru/convent/137/volgacon_2001_2.htm].

2. 1970年代のSFの出版状況について

まずはヤクボフスキイやビチュツキイがファン活動を始めた1970年代後半のSF小説の出版状況を振り返っておきたい。

当時のSF小説の出版状況は、コムソモール中央委員会に属するモロダヤ・グヴァルジヤ社がほぼ独占している状態であった。モロダヤ・グヴァルジヤ社は1960年代にはセルゲイ・ジェマイチスとベーラ・クリューエワというSFに見識のあるふたりの編集者の活躍によってストルガツキイ兄弟ら「第三の波」の作家たちの作品を積極的に出版し、ブームを支えた。

モロダヤ・グヴァルジヤ社の刊行物のなかで、最初に注目しておきたい刊行物は、1962年から1992年まで刊行された年鑑アンソロジー「ファンタスチカ」《Фантастика》である⁽⁹⁾。ソ連時代にはSF専門誌が刊行されず、モロダヤ・グヴァルジヤ社の傘下の科学啓蒙雑誌である「技術青年」《Техника-молодежи》や、同じくモロダヤ・グヴァルジヤ社傘下の雑誌である「世界めぐり」《Вокруг света》の別冊として1961年から刊行された「イスカーチェリ」《Искатель》がSFにも誌面を割く程度であった⁽¹⁰⁾。そのため、「ファンタスチカ」はソヴィエトSFの中短編の新作が読める数少ない貴重な媒体であった。

また、モロダヤ・グヴァルジヤ社は、1965年から1976年にかけて、国内外の現代SF全集とも言うべき叢書「現代ファンタスチカ全集」《Библиотека современной фантастики》を刊行した。当初は15巻の予定であったが、好評に応じて25巻となり、さらに3巻が補巻として刊行された⁽¹¹⁾。ここでソ連に紹介された作品は、ブラッドベリ「華氏451度」、レム「星からの帰還」、アシモフ「永遠の終わり」、シマック「都市」、ウィンダム「トリフィドの日」、安部公房「第四間氷期」、プール「猿の惑星」、ヴォネガット「プレイヤー・ピアノ」、チャベック「絶対子工場」など数多く、ソヴィエト時代を代表する出版物のひとつである。また、同時代のソヴィエトのSF作家の作品を紹介する叢書として企画された「ソヴィエト・ファンタスチカ全集」《Библиотека советской фантастики》(1967～91)は、最終的には120巻を超えるなど、長期にわたる大規模な刊行物として影響力を持った⁽¹²⁾。

モロダヤ・グヴァルジヤ社以外にもズナーニエ社が刊行していた年鑑アンソロジー「エヌエフ」《НФ》やミール社が刊行していた翻訳SFシリーズ「国外ファンタスチカ」《Зарубежная фантастика》は全国規模の出版物として重要なものであり、雑誌としてはスヴェルドロフスクで刊行されていた「ウラルの猟師」《Уральский следопыт》が新進作家にとっては重要な存在であったが、モロダヤ・グヴァルジヤ社が持っていた影響力は圧倒的なものであった。

しかし、モロダヤ・グヴァルジヤ社の編集部からジェマイチスとクリューエワが追放され、1974年からユーリイ・メドヴェーデフがSF出版の実権を掌握するに伴い、モロダヤ・グヴァルジヤ社のロシアSF史における位置づけは大きく変わった。メドヴェーデフは自分の周り

9 《Молодая гвардия》: Время. Книги. Судьба. М.: Молодая гвардия, 2002. С. 475.

10 《Молодая гвардия》: Время. Книги. Судьба. С. 166, 453-455.

11 《Молодая гвардия》: Время. Книги. Судьба. С. 48-49.

12 《Молодая гвардия》: Время. Книги. Судьба. С. 48.

に派閥を形成し、SF出版を私物化してストルガツキイ兄弟をはじめとする「第三の波」の作家を敵視するようになった⁽¹³⁾。欧米SFの紹介の機会も大幅に減少した。

ヤクボフスキイとビチュツキイがSFファン活動を始めた70年代後半には、ストルガツキイ兄弟のような、ファンが本当に読みたい作家の作品の出版の機会がほとんどなかった。しかも、出版されても増刷のシステムが存在しないため、需要に応えるだけの印刷がなく、ストルガツキイ兄弟の作品は熱心なファンたちによってタイプライターなどでコピーが作成され、ファンたちの間で回覧されたり、他の作品と交換されたり、売買されたりしていた⁽¹⁴⁾。エカテリンブルグのSFファンであるウラジーミル・コプロフは60年代初めからSFファンとなり、ストルガツキイ兄弟のファンとしてサミズダートも含めて作品収集に努めた。写真を撮ることでコピーを作成し、当時ソ連国内では刊行されていなかった「みにくい白鳥」まで棚にはあったという⁽¹⁵⁾。ファンたちは一種の飢餓状態にあったと言えるだろう。

3. «Мы не одни!» の内容

3-1. SFファンクラブ活動の内容と出版状況

ロシア語でファンは«фэн»もしくは«любитель»、SFのファンクラブは«КЛФ» («клуб любителей фантастики»の略称)と呼ばれる。ヤクボフスキイとビチュツキイの回想によれば、ロストフでSFファンクラブが設立されたのは1977年のことで、ロストフ在住の作家ペトロニイ・ガイ・アマトウニが関わっていたという⁽¹⁶⁾。

アマトウニは1916年生まれの小説家で、40年代から作品を発表し、児童向けのSFで名を知られるベテラン作家であったが、ストルガツキイ兄弟やブリチョフ、サフチェンコ、ミハイロフといった当時人気のあった、60年代に登場した「第三の波」の世代に属する作家たちの系列には入っておらず、SFファンたちにとってはいまひとつ物足りない作家であったと言えるだろう。

アマトウニはこのクラブを自分のファンクラブだと思っていたようだが、ファンの思いは違った。クラブの2回目の例会で、アマトウニが演壇にのぼって30人ほどの聴衆を前に話を終えたとき、聴衆から何のたわごとをほざいているんだと罵声を浴びせられたという。アマトウニは激怒したが、その後もクラブには顔を見せた⁽¹⁷⁾。

あるとき、クラブの例会でSFに関するクイズ大会をすることになり、ヤクボフスキイは賞品として、年鑑アンソロジー「ファンタスチカ'77」とオブルーチェフの古典的作品「ブ

13 モロダヤ・グヴァルジヤ社の専横については、80年代半ばにモロダヤ・グヴァルジヤ社のウラジーミル・シチェルバコフを訪れた際の波津博明のレポートに詳しい。波津博明「海外SF情報」『SFマガジン』1985年10月号、220-225頁。また、モロダヤ・グヴァルジヤ社に群がっていた人物の90年代以降の凋落については、波津がシチェルバコフを再訪した際の以下のレポートを参照。波津博明「WORLD SF REPORT」『SFマガジン』1993年4月号、194-199頁。

14 Неизвестные Стругацкие. От «Страны багровых туч» до «Трудно быть богом»: черновики, рукописи, варианты. Донецк: Сталкер, 2005. С. 5.

15 コプロフについては以下のURLを参照。[http://fandom.rusf.ru/klf/klf_sverdl_30.htm]

16 «Мы не одни!».

17 «Мы не одни!».

ルトニヤ」、それにアマトウニの新刊を用意したが、一等、二等、三等の順番を付けずに勝った人から本を自由にとっていいとしてしまったため、アマトウニの本が最後になってしまい、それを見たアマトウニは、微笑を浮かべながらも、また激怒したという⁽¹⁸⁾。

これらのエピソードで注目したいのは、地方のクラブの中心には地方の作家がいる場合もあるが、それに必ずしもファンは満足しているわけではなく、「ファンタスチカ'77」のような全所的に影響力のある刊行物を歓迎するということである。

ロストフにある作家と出版物だけでは満足できないファンは次の段階へと移っていく。

3-2. 他地域のファンとの交流

ロストフで細々とファン活動をおこなっていたヤクボフスキイは、1979年にトビリシのSFファンクラブの会員の男がロストフのクラブを訪れたことで、トビリシにも同じようなSFファンクラブがあることを知り、狂喜してトビリシのファンクラブを訪れた。その後、トビリシのファンも同じようにロストフを訪れ、ヤクボフスキイらはパーティーやコンサートなどでもてなした。これが他の地域のクラブとの「ファースト・コンタクト」であった。ヤクボフスキイによれば、トビリシのクラブとの交流はヤクボフスキイらを「高めた」と言う。その後もロストフとトビリシの間では手紙による情報交換が続いた⁽¹⁹⁾。

その後の2年間はトビリシのクラブとの間の交流しかなかったが、1981年の秋にビチュツキイはペルミのファンであるアレクサンドル・ルカーシンの手紙を受け取り、ペルミで小説家やファンが集うセミナー「平和と人間性の進歩のためのファンタスチカ」が開催されることを知った⁽²⁰⁾。ヤクボフスキイとビチュツキイはロストフの読書家協会からの派遣でペルミへ行くことになった。セミナーには当時新進気鋭の若手作家として頭角を現しつつあったヴィタリイ・バベンコとフェリクス・ディモフ、ヴル・ガーコフの筆名で欧米SFの情報に通じた評論家のミハイル・コワリチュークが参加していた。州のコムソモールの住所しかふたりには知らされていないがなんとかセミナーにたどり着いた。参加者の泊まるホテルはひとつだけで、ヤクボフスキイらは他の参加者が泊まる部屋を訪ねて行って朝の四時までひたすらしゃべった。このときの興奮をヤクボフスキイは次のように回想している。

これは最初のセミナーだった。おれたちは実際ほとんど眠らなかった。おれはペルミもカマ河も見なかった。空港へ向かうバスが通った町外れの木彫りの窓枠以外にはペルミのすばらしい街並みも見ることにはなかった。というのも途切れることのない出会いと会話、それにルカーシン以外にはなにもなかったのだから⁽²¹⁾。

ルカーシンのような情熱的なファンの存在はヤクボフスキイたちにとっては想像を超えた

18 «Мы не одни!».

19 «Мы не одни!».

20 このペルミで開催されたセミナーは同年に開催された第1回のアエリータよりは後になるが、第1回のアエリータへのファンの参加はほとんどがスヴェルドロフスクとペルミからだけであったため、ペルミのセミナーをソ連初の大規模なSF大会と位置づける意見もある。

21 «Мы не одни!».

存在であったのだろう。さらに、ヤクボフスキイはアレクサンドル・ブシコフのデビュー作である短編「Варяги без приглашений」が掲載された雑誌をルカーシンから奪い取った⁽²²⁾。

ペルミのセミナーの衝撃は大きく、ヤクボフスキイらはロストフでも自分たちのセミナーを開催することを決意した。しかし、ヤクボフスキイたちはアエリータの存在を知らされておらず、開催時期が重なってしまう結果となった。1981年のペルミのセミナーでも誰もアエリータのことをヤクボフスキイらに伝えたものはいなかったそうである⁽²³⁾。

1982年4月23日から24日にかけて開催されたロストフのセミナーは、バベンコ、アレクサンドル・シレッツキイといった小説家のほかに、ユジノサハリンスク、ヴィリニユス、ハバロフスクからもファンが参加した。読書家協会と州のコムソモールもヤクボフスキイらを気前よく支援し、ロストフでは一生手に入らないような本をクラブに届けたり、資金面の援助をしたりした。他地域のファンの熱狂もすさまじく、読書家協会の地区の幹部が開会式で挨拶をしているとロストフ近郊のゴルロフカから飛び入りで来ていたヴィクトル・チェルニクというファンが、「ゴルロフカからもここに来ているぞ！ どうしておれたちを数に入れない？」とホールから叫びだした⁽²⁴⁾。

こうしたロストフのファン活動は注目を集め、1982年にはスヴェルドロフスクの雑誌「Уралの獵師」がビチュツキイとリュブキンによるロストフのクラブの活動を紹介する記事を掲載した⁽²⁵⁾。「Уралの獵師」の編集部にいた古株のSFファンであるヴィタリイ・ブグロフはときおりビチュツキイに電話をかけてきたが、一回の電話は50分ばかりに及んだという⁽²⁶⁾。「Уралの獵師」や「技術青年」はロストフのクラブの連絡先を掲載したため、ビチュツキイのもとには手紙が洪水のように押し寄せた⁽²⁷⁾。ロストフと同じようなセミナーは各地で開催されるようになったが、その情報は全ソ読書家協会では把握されていたようである⁽²⁸⁾。しかし、地方のファンは依然として本の欠乏を感じていたとヤクボフスキイは述懐している⁽²⁹⁾。

一方で、前年のすぐれた長編や短編に対して、SFファンの投票により与えられるヴェリーコエ・コリツォ賞が1982年に創設された。当初の3年間は、各個人ではなく、各ファンクラブが投票権を持ち、投票は郵便によりおこなわれた⁽³⁰⁾。この投票の集計にあたったのがヴォルゴグラードのファンクラブ「時の風」であり、ザヴゴロドニイやセルゲイ・ジャルコフスキイといった有力なファンが集っていた。ロストフのヤクボフスキイやビチュツキイたちはこの活動に刺激を受け、ロストフのクラブではSFの書誌を作成し始めた⁽³¹⁾。

22 ブシコフのこの短編のちにボリス・ザヴゴロドニイが主催した、ファンクラブの人気投票で選出されるヴェリーコエ・コリツォ賞短編部門の第1回目の受賞作となる。

23 «Мы не одни!».

24 «Мы не одни!».

25 Битюцкий С., Рыбкин В. Вести из КЛФ // Уральский следопыт. 1982. № 11. С. 70 [http://fandom.rusf.ru/klf/klf_rostov_4.htm].

26 «Мы не одни!».

27 «Мы не одни!».

28 «Мы не одни!».

29 «Мы не одни!».

30 ヴェリーコエ・コリツォ賞については以下の URL を参照。 [http://www.rusf.ru/awards/vel_kol/index.htm]

31 «Мы не одни!».

1983年のアエリータにはヤクボフスキイとビチュツキイも参加した。各地のクラブは高揚していたという。そのときに出会ったノヴォシビルスクから来たヴィタリイ・ピシチェンコは、SFファンクラブにとってコムソモールとの関係を強化することが必要だと長らくヤクボフスキイに信じこませたという。ヤクボフスキイは当時を振り返って、当局の文化・宣伝機関にとってはSFなんて蚊みたいなもので、飛んでいたらぴしゃりと叩けばいいし、残りはそのまま飛ばせておけばいいと考えているということ、まったくおれたちはわかってなかったと言う。一方で、当局もSFファンたちがいったいなにをしているのか本質的な点はまったくわかっていなかったと回想する⁽³²⁾。

1983年の10月にもロストフのクラブはセミナーを開催しようとしたが、党の州委員会から開催直前になって中止の命令を受けるなど混乱し、セミナーではなく通常の例会の拡大版という名目にして会場を変更するなど苦心の末に、開催にこぎつけた。中止しようにも参加者が多すぎてモスクワ以外には連絡が取れず、ユジノサハリンスクからの参加者などはずでに出発の準備をしていたためどうしようもなかったのである。1982年のセミナーと同様に各地のファンクラブの活動家のほか、アムヌエリ、シェスタコフといった作家など総勢50人から60人が参加した。結局、来なかったのはモスクワだけであった⁽³³⁾。

このセミナーの後、ロストフのクラブは10から20ものクラブとの間で回状をやり取りするようになった。ヤクボフスキイは各地のクラブの活動を統合するような組織を作りたかったと回想している⁽³⁴⁾。

こうしたファン活動の高揚に対して、発展の方向性が模索された。SFファンクラブの基盤はさまざまであり、読書家協会やコムソモールの指導下にあるクラブもあったが、一様ではなかった。1983年の「技術青年」誌にはファンクラブに関する二つの論文が載ったが、当時、「技術青年」誌ではアレクサンドル・オシポフがファンクラブの統合を目指していた。オシポフは、SFファンクラブは当局の指導のもとに管理されるべきであると考え、全国規模の連合組織を構想した⁽³⁵⁾。これに対して現在のヤクボフスキイはオシポフは魚の群れを操るようにファンを操ろうとしていると反発するが、ヤクボフスキイの当時の考えも連合組織とい

32 «Мы не одни!». ピシチェンコはこのとき、すでにコムソモールの活動家であったが、ヤクボフスキイは当時は知らなかったと回想している。

33 «Мы не одни!».

34 1984年には、ウファのファンであるエフィーモフも、SFの本だけではなく、同じような仲間を求める愛好家が存在すると指摘している。*Ефимов И.* Великое кольцо // Ленинск. Уфа, 1.3.1984 [http://fandom.rusf.ru/klf/klf_019.htm].

35 議論の発端となったオシポフの文章は以下を参照。*Осинов А.* От Калининграда до Хабаровска // Техника-молодежь. № 11. 1981. С. 10-11 [http://fandom.rusf.ru/klf/klf_009.htm]. オシポフはソ連崩壊後の著作でも、1980年代のファンダムが政治的組織としてファングループの連合体の構想に積極的に関わらなかったことを批判している。特にファンダムの不健全な潮流として、ファンダムがストルガツキイ兄弟の作品を正典化し、偶像崇拜的な態度を取ったと書くなど、ヤクボフスキイらとの対立は根深いものを感じさせる。*Осинов А.* Фантастика от А до Я. М.: Дограф. 1999. С. 125-128. また、深見弾はSFマガジン誌上で当時の「技術青年」誌の議論を紹介している。深見弾「深見弾のソ連・東欧SF情報」『SFマガジン』1982年11月号、174-179頁。

う点ではオシポフに近いものが幾分かはあったようである⁽³⁶⁾。

1981年から83年にかけて、ファンクラブが交流を進めることによって各地のファン活動のあり方も他地域の方法を取り入れて大きく変貌を遂げた。各地のファンクラブは読書家協会や州のコムソモールの支援を受けながら大規模なセミナーの開催にもこぎつけた。一方で、各地のファン活動の高揚を全国的な連合組織の設立へとつなげる構想も見られたが、本の欠乏をどのように克服するかというSFファン活動の根源的な問題の解決につながる構想は見られなかったと言えるだろう。

3-3. ファンとプロ

各地でSF大会やセミナーが開催されるにつれて、ファンと小説家などのプロとの交流が増えていった。SF作家に会うことはSFファンにとってのもっとも強い願望であり、喜びであったが、一方でファンがプロとの間に厳然たる区別を感じていたことがヤクボフスキイやビチュツキイの発言の端々からうかがえる。

1982年のカーニングラードで開かれた読書家協会主催のSFと冒険小説ファンのためのセミナーには、小説家としてバベンコ、ディモフ、ゲヴォルキャン、評論家のコワリチュークなどが参加した。ファンとしてはヤクボフスキイ、ザヴゴロドニイのほかにもルマンスクヤカーニングラードの地元のクラブからも参加者がいた。しかし、プロとファンの泊まるホテルが分けられたり、遠足も軍港のある閉鎖都市へはプロだけが行くことができたりと差別がされていた。そのときにコワリチュークはプロのなかに入れるように取り計らってもらったという⁽³⁷⁾。

だが、今日の視点で見たときにもっと興味深いのは、1990年代のSFコンヴェンションで酔いつぶれて「死体」ようになったファンの姿をビチュツキイが嘆いたときに、ヤクボフスキイがおれたちのクラブも80年代にはいろいろな試練に耐えたが、マレエフカのセミナーに自分たちのクラブからニコライ・ブローヒンたちを送りだすことができるほどの力は蓄えていたと答える箇所である⁽³⁸⁾。

確かにモスクワ郊外のマレエフカで1982年から開催されるようになった若手のSF作家のための作家同盟主催のセミナーは、ヴォイスクンスキイやピレンキンなどの60年代に活躍した「第三の波」の作家たちを講師に迎え、このセミナーから次代の「第四の波」を担う作家たちがたくさん輩出したことから見ても意義深いものがある⁽³⁹⁾。しかし、ボリス・ストルガツキイが1974年からレニングラードで主宰していたセミナーにすでに参加していたボリス・シテルンは、マレエフカのセミナーは他のセミナーと比べてよくも悪くもないが、自分はすでにこうした初心者の集まりからは卒業したと述べており、百名近い参加者のうち

36 «Мы не одни!». Борис·Завгороднийも同様に、当時はファンクラブの連合体を構想していた。
Завгородний Б. Ветер времени [http://fandom.rusf.ru/convent/19/aelita_1982_15.htm].

37 «Мы не одни!».

38 «Мы не одни!».

39 セミナーは1985年からはラトビアのドゥブルティに開催地を移して開催されるようになった。

チャンスがあるのはごく一部の人間だけだと述べ、あまり高い評価を与えていない⁽⁴⁰⁾。ボリス・ストルガツキイのセミナーで生まれたプロ意識から見れば、マレエフカのセミナーはシテルンには物足りないものに見えたのであろう。

しかし、ロストフのようにすぐれた SF 作家を輩出しているとは言いがたい地域のファンにとって見れば、マレエフカのセミナーへ参加すること自体が名誉といまでも考えていることがこの対談の発言からわかるのである。実際のところ、ブローヒンはマレエフカのセミナーで評価された短編が 1983 年の「エヌエフ」に掲載されただけで、その後活躍したとは決して言えない人物である。このヤクボフスキイの評価自体がプロとしてのものではなく、ファンとしての心情が強く出たものとも言えるだろう。

このことは 80 年代のファン活動の歴史的意義について考えさせるものがある。すなわち、ファン活動がさかんであることがプロの活性化に直接つながるかという点、必ずしも一概にそうとは言えないことを示しているからである。

また、ビチュツキイも元来は作家志望であった。だが、少年時代に書かれたその作品はブホフやアマトウニといった作家に見てもらったものの、高い評価は得られず、その後に作家として飛躍的成長を遂げることもなかった⁽⁴¹⁾。同じように作家になることをあきらめた人物はたくさんいるが、SF への関わりを断ち切れない者はあらためてファンとして自分を定義していくことになった。

3-4. ファンダムへの圧力

1983 年にロストフのヤクボフスキイたちのクラブ活動はひとつのピークを迎えた。しかし、ソ連共産党本部は各地で活発化したこうした SF ファンクラブの活動に対して警戒を強めていた。

1984 年 3 月 19 日付のソ連共産党中央委員会宣伝部の「SF ファンクラブの活動における深刻な欠陥について」という文書によれば、ソ連共産党中央委員会宣伝部は読書家協会、青年向けの新聞、作家や記者の各種組織、図書館、文化会館、小学校から高等教育の学校にいたる各種教育機関を基盤にして SF ファンクラブが各地で組織されていることをつかんでいた⁽⁴²⁾。

この文書におけるソ連共産党の見解は次のようなものである。こうしたファンクラブは青年層をソヴィエト SF に近づけて創作活動の発展に寄与するとともに、青年層の科学と文学への関心を高めることが期待されるが、一方でファンクラブの指導者層は適切な知識も身につけておらず、政治的にも思想的にも不適切な傾向を示しており、結果として多くのファンクラブは自然発生的に生まれ、その活動も統制されていないというのである。

40 *Прашкевич Г.М.* Малый бедкер по НФ // Малый бедкер по НФ. М.: АСТ, 2006. С. 532. シテルンがプラシケヴィチにあてた手紙による。手紙はプラシケヴィチのエッセイに登場する。ちなみに、チャンスがある人間としてシテルンが名をあげた人物は、バベンコ、ゲヴォルキヤン、ルキーン夫妻、ラザルチューク、ポクロフスキイ、シレツキイ、ルィバコフ、ロギノフ、カラリスであるが、ほとんどがこの後の「第四の波」の潮流の担い手となって活躍した。

41 «Мы не одни!».

42 *Ревич В.А.* Дела давно минувших дней // Знание-сила. 1993. № 7. С. 86-103.

具体的なファンクラブの問題活動としてあげるものは次のようなものである。ファンクラブのなかにはアメリカ、イギリス、フランスなどの作家たちの作品を研究しているものもあり、翻訳する者さえ存在するほか、創作を手がける者も現われ、一部の作品は地方の新聞や雑誌等で刊行されている。他のクラブに資料を送ったり、同人誌や情報誌を発行したりする者もある。文化関係の各種組織の許可を受けることなく、討論会やテーマ別のパーティー、ショーなどを開催している。こうした催しに関する記事はコムソモールの雑誌や新聞にも定期的に掲載されており、とりわけ、「技術青年」、「文学展望」《Литературное обозрение》、「ウラルの獵師」がSFファン活動の紹介に熱心であると指摘する。

各地のファンクラブの活動についても、カリニングラードやヤクボフスキイらのロストフのクラブのセミナーが違法行為の実例としてあげられ、1983年のアエリータについては開催規模や今年の4月にも開催予定であることに言及している。

結論としては、文化省に対してこれらのクラブに対する組織的な指導を求め、共産党の各州委員会、文化省、全ソ労組中央評議会、コムソモール、全ソ作家同盟、全ソ読書家協会などに対して、ファンクラブの活動を監視し、活動の欠陥を取り除き、不適当なファンクラブの指導者を排除し、違法な出版活動を禁止する措置をおこない、大規模な催しをおこなうのは各種文化当局の機関の承認を受けた場合に限ることが確認された。

この決定を受けて、1984年4月16日にソ連共産党中央委員会の第148回書記局会議で、西欧諸国のブルジョア的イデオロギーに対して青年層を守るという立場から同様の議論がなされた⁽⁴³⁾。

これらの影響を受けてか、ヤクボフスキイのクラブにも1984年に各種団体から監査が入るようになった。まず1984年の春に全ソ労組中央評議会が監査にやってきた。しかし、ピチュツキイたちはファンクラブの規約や例会の議事録、講演の原稿やそれに対する反応などの書類を完璧に整え、監査員に提出したところ、監査員は大いに弱り、問題はないと結論づけざるをえなかった。だが、そのときの監査員の話で、ナチスのカギ十字を壁に描いた若者がいるという話題が出て、SFのファンクラブにはなにか危険なものがあると思われるというほめかされた。一方で監査員はクモの巣のように整然としたファンクラブの運営に対して驚きを隠さなかったようである⁽⁴⁴⁾。

次に文化省から来た監査員はさらに厳しくヤクボフスキイらを追及し、講演の原稿が決定稿ではなく、議事録も不完全だと非難した。ヤクボフスキイらは抗議したが聞き入れられず、ほんとうはおまえたちは何の活動に携わっているのだと監査員は重ねて追求してきたが、「われわれは青年の共産主義的教育に携わっています」と答えたところ、うそをつけと一蹴された。結局、監査員はヤクボフスキイたちにとって不利な報告をおこなった⁽⁴⁵⁾。

その後、読書家協会からも監査が入った。監査自体はたいしたことはなかったが、1984年の4月のアエリータにヤクボフスキイが参加しようとして、航空券も購入していたところ、電話がかかってきて、もし参加すればロストフのクラブは活動が禁止されると脅迫を受けた。

43 Ревич В.А. Дела давно минувших дней (前注 42 参照) .

44 «Мы не одни!».

45 «Мы не одни!».

ヤクボフスキイは大学の物理学部に職を得ていたため、ヤクボフスキイを追跡することは容易であった。ヤクボフスキイはアエリータへの参加を断念した。その後、党州委員会の文化部長代理がビチュツキイらのもとを訪れ、今度からクラブの例会に参加すると通告してきた。しかし、9月の例会でも特に不審な点は見当たらなかった。だが、11月の例会で、読書家協会はコムソモールとともに、ヤクボフスキイらのSFファンクラブを冒険小説のファンクラブと合同し、コムソモールの市委員会に所属することと決めたと事前の予告もなしに告げ、ロストフのファンクラブは解散に追いこまれ、ヤクボフスキイはクラブを去った。しかし、11月の例会にいなかったために何も聞いてなかった人は12月の例会にいつもどおりに参加し、ヤクボフスキイはどこにいるのかと周りの参加者に聞いたという。すると事情を知る参加者がこっそりと経緯を教えていたという⁽⁴⁶⁾。

ヤクボフスキイやビチュツキイ個人にも圧力は向けられたようである。ヤクボフスキイの妻を解雇しようという策動もあったようだが、コネがあったので実現にはいたらなかったとヤクボフスキイは回想している。ヤクボフスキイの知人は国家保安委員会から呼び出しを次々と受けていたことを考えると相当な圧力を感じていたようである⁽⁴⁷⁾。

このロストフのSFファンクラブの解散事件は、明らかに1984年の党本部の決議の影響と考えられるが、同様にペルミ、スヴェルドロフスク、ヴォルゴグラード、ウラジオストクのファンクラブが圧力を受けている。ペルミの党州委員会はルカーシンをSFファンクラブの代表から解任するようにと決定した⁽⁴⁸⁾。1985年のアエリータは、各地のファンダムが圧力を受けていたため、公的な招待状の発送を見送り、半ば非合法的に開催することを強いられた。1986年のアエリータは当局から開催中止の命令を受け、開催されなかった⁽⁴⁹⁾。ヴォルゴグラードではザヴゴロドニイたちがクラブの名前を一時的に変えてやり過ごした⁽⁵⁰⁾。

このときのことをヤクボフスキイとビチュツキイが振り返った箇所は非常に興味深いので以下に紹介する。

ビチュツキイ

おれがすでに述べたように、おれたちは若くして死んだのだ。党の連中がおれたちの頭を殴りさえしなければ（もちろんおれたちは連中の注意を引きつけたことは誇りに思っているわけだが）、おれたちが頭に打撃をくらいさえしなければ…つまるところ、進化は同じような道をたどって進行するのだ。求心力は最初の歓喜が訪れたのと同じように弱まっていった。つまり、ペルミでの最初の邂逅につきるのだ…確かにおれは知らない。エルベ川での邂逅も火星での邂逅もどんなものであったか。

46 «Мы не одни!».

47 «Мы не одни!».

48 Кротов В. Портрет председателя на фоне клуба // Лавка фантастики. 1997. № 2. С. 53-55 [http://fandom.rusf.ru/klf/klf_perm_10.htm].

49 Аэриетаについては以下の URL を参照。[http://rusf.ru/aelita/chronical.html]

50 Арбитман Р.Э. Борис, который оказался прав // Кузнецкий рабочий. 1992. № 117. С. 4 [http://fandom.rusf.ru/klf/klf_volgograd_20.htm].

ヤクボフスキイ

主よ。おれたちは他の文明と出会ったのです！おれたちだけじゃないということがわかったのです！

ビチュツキイ

おれたちの1982年のセミナー、おれたちが行けなかったアエリータ、禁止された1983年のおれたちのセミナー、これらは奇跡だ。奇跡が起きているのだ。おれたちは自らの手で巨大なシステムを解き放つのだ。だが、すでに最初の歓喜は遠くへ過ぎ去っていた。10年暮らした妻とのキスのように。知り合って二日目のキスではなくて。だが、逆に遠心力は成長し、軋轢のようなもの、つまらぬ個人的な怒りが生まれた…もしおれたちのクラブを解散していなければ、遠心力が求心力より大きくなってしまってシステムが崩壊し始めたかもしれないとおれは思う。

ヤクボフスキイ

いや、おれはそこまでは思わん。

ビチュツキイ

システムは強力な変化にも耐えられたかもしれないと思うのか。

ヤクボフスキイ

おれには別の感覚がある。つまり、1983年に、ソ連共産党とは別種の党派的なシステムのようなものになるチャンスを持っていた組織のようなものを始めたという感覚があった。読書家協会は表向きのこと。傘さ。⁽⁵¹⁾

「システム」という単語が出てくるが、これはファンクラブの「システム」のことである。もちろん、2001年の時点から振り返った言葉であるが、1980年代のファンクラブのあり方を考えるうえで見過ごすことのできない箇所である。直接的には党からの圧力によりファンクラブは解散に追いこまれたわけだが、それとは別の内的なダイナミズムがファンクラブの運営のなかに存在していたことをうかがわせる対話である。

このような状態のもとで、各地のクラブは身を潜めて時機が好転するのを待っていた。ロストフのクラブは1985年から86年にかけては活動を停止し、ヤクボフスキイはファン活動からは離れ、学位論文の執筆に時間を費やしていた⁽⁵²⁾。

3-5. ファンダム復活

SFファンクラブ活動を取り巻く情勢が好転したのは1987年になってからのことであった。1987年には前年に中止されたアエリータが再開され、ファン活動が再活性化し始めた。ロストフではコムソモールの指導下で青年層の各種クラブの独立採算制の連合組織である「余暇」«Досуг»が設立されたが、ヤクボフスキイは組織の幹部からSF関係のクラブも作ってほしいと打診された⁽⁵³⁾。しかしながら、読書家協会との交渉は不調に終わり、ヤクボフ

51 «Мы не одни!».

52 «Мы не одни!».

53 «Мы не одни!».

スキイらのクラブの再建に必要な会場等の世話は受けることができなかった⁽⁵⁴⁾。

しかしながら、ヤクボフスキイは1987年の5月に開催されたアエリータに参加した。アエリータではトビリシのファンであるイラクレイ・ワフタンギシヴィリがSFファンクラブの代表の連合組織を設立するという案を提示してきたが、これは1983年当時のヤクボフスキイの考えと同じものであった。しかし、クラブの解散等の経験を積み重ねたヤクボフスキイはワフタンギシヴィリに反論し、参加者には動揺が広がった⁽⁵⁵⁾。

その後、ヤクボフスキイはノヴォミハイロフカで開催されたセミナーに参加した。参加者はモロダヤ・グヴァルジヤ社にいたファレーエフやポドコルジンのほか、ウラジーミル・ミハイロフ、シレツキイ、ウラジーミル・フルーモフ、ザヴゴロドニイ、ウラジーミル・ゴブマン、ロマン・アルビトマンがいた。しかし、このセミナーでヤクボフスキイに強い印象を与えたのはピシチェンコである⁽⁵⁶⁾。ピシチェンコはモロダヤ・グヴァルジヤ社に取り入り、ユーリイ・メドヴェーデフを中心に全ソ新進SF作家創作連合（Всесоюзное творческое объединение молодых писателей-фантастов。以下ВТО МПФと略す）の創設を決定していた。ピシチェンコは各地のクラブを基盤に組織を拡大し、各クラブへの援助もおこないながら、モロダヤ・グヴァルジヤ社の持つ販路や宣伝力を活用して新人作家の出版を目指すという立場をとった⁽⁵⁷⁾。新しい作家の登場に飢えていたファンや作家たちはこの提案に興奮した。

しかし、70年代からSF出版を私物化していたモロダヤ・グヴァルジヤ社と手を組むことはファンたちに疑問も抱かせた。しかし、ピシチェンコはメドヴェーデフらをしぶとく擁護し、自分もこれからは作家として金も稼ぐし、組織化を進めると意気揚々と語った。ところが、その場に酔っ払ったザヴゴロドニイがやってきてピシチェンコに向かってピシチェンコの書いているものはクソだと罵り、ピシチェンコは空気の抜けた風船のようにしょげ返ったという⁽⁵⁸⁾。

新しい可能性が開けていると感じたヤクボフスキイは自分たちも新人作家のアンソロジーを作ろうと作品を集め始めたが、時間がかかったために果たせずに終わった。当時はヴォルゴグラードの地方作家にとどまっていたルキーンは、骨折してすでに癒着した手がどんな感覚がするかと述べたという⁽⁵⁹⁾。

ピシチェンコの路線はさらに拡大する様相を見せ、1987年末にはマグニトゴルスク在住のファンのタチャーナ・プリダンニコワは、ピシチェンコがコムソモール中央委員会に入り、

54 *Синеок С.* Грамота за...вредность // Комсомольская правда. 29.3.1988. С. 2 [http://fandom.rusf.ru/klf/klf_rostov_1.htm].

55 «Мы не одни!».

56 «Мы не одни!».

57 ВТО МПФ 側からの文献としては以下を参照。*Ярушкин А., Осокин А.* Фантасты ищут читателя // Советская Эстония. 9.10.1988 [http://fandom.rusf.ru/klf/vto_4.htm]; *Пухов М.* Фантастика на хозрасчете // Техника-молодежи. 1989. № 2. С. 44-45 [http://fandom.rusf.ru/convent/123/borisfen_1988_3.htm]. ВТО МПФ に対抗した側からの文献としては以下を参照。*Гопман В.* Былое и думы [http://fandom.rusf.ru/inter/gopman_07.htm].

58 «Мы не одни!».

59 «Мы не одни!».

ソヴィエトを設立して、SF ファンクラブを組織化するという情報を得たとヤクボフスキイに伝えてきた。これを裏付けるかのように、1988年1月にはヤクボフスキイのもとにコムソモールの中央委員会から電話がかかってくる、SF ファンクラブの組織化のためのリストがあるのだが、意見を聞きたいと言ってきた。そのリストにはピシチェンコ、ヤルシキン、グリャコフスキイ、メドヴェーデフ、ドミトルークといったモロダヤ・グヴァルジヤ社の派閥の作家の名が並んでいたため、ヤクボフスキイはこれらの人物ではファンクラブに対して否定的な関係を持つことになるかと指摘し、ザヴゴロドニイやワフタンギシヴィリ、ボリソフ、チェルニク、クリツ、シジュークなどの名前を挙げたメモを作った。そのメモが採用されてモスクワで第一回全ソ SF ファンクラブ評議会の準備の会議が開かれることになり、ヤクボフスキイのほか多くの SF ファンが集まって各クラブの規約を参考に新しい評議会の規約と議事運営次第を作成した。さらに主なクラブにコムソモールの中央委員会から招待状が届くように住所一覧を作成した⁽⁶⁰⁾。

そして、1988年3月16日から18日にかけてキエフで第一回全ソ SF ファンクラブ評議会が開催されたが、ヤクボフスキイたちがリストに入れなかったピシチェンコやヤルシキンも参加し、SF ファンクラブのソヴィエトの代議員を選出する際に争いとなった。ヤクボフスキイたちはあらかじめ自分たちの候補者リストを作成していたのだが、会場からピシチェンコ、ヤルシキン、メドヴェーデフ、ドミトルーク、シチェルバコフらモロダヤ・グヴァルジヤ社やВТО МПФのメンバーを候補者に入れるように声が上がって、加えるほかなくなった。しかし、ヤクボフスキイが壇上のアルカージイ・ストルガツキイに質問して状況を変えた。

ヤクボフスキイ

あなたは「エフレーモフ・スクール」についてどのようにお考えでしょうか。

ストルガツキイ

ミーシャ、君はなんてくだらんことを聞くのかね！エフレーモフは私たちの師だ。いったいだれが自分たちのことを「エフレーモフ・スクール」と呼んでいるんだ。言いたいように言わせておけ！⁽⁶¹⁾

モロダヤ・グヴァルジヤ社のメドヴェーデフたちはストルガツキイ兄弟を排撃するためにイワン・エフレーモフの権威を借りようとし、「エフレーモフ・スクール」を名乗っていたが、実際はエフレーモフの文学への理解はなく、党派的な名称にすぎなかった。アルカージイ・ストルガツキイは、エフレーモフは60年代の「第三の波」の作家のすべての師であり、特定の流派に限定された存在ではないと明言し、モロダヤ・グヴァルジヤ社の派閥の主張に厳しく反論したのである⁽⁶²⁾。

投票結果はヤクボフスキイらの勝利に終わった。選出メンバーはファンクラブから20人で、ハルィムバツジャ（スヴェルドロフスク）、ザヴゴロドニイ（ヴォルゴグラード）、ヤク

60 «Мы не одни!».

61 «Мы не одни!».

62 エフレーモフ・スクールについては以下も参照。Маслов А. Немного о Школе Ефремова // Наше время (Ростов-на-Дону). 15.7.1991. С. 2 [http://fandom.rusf.ru/klf/vto_2.htm].

ボフスキイ (ロストフ・ナ・ドヌー)、クリツ (ニコラエフ)、ポリソフ (アバカン)、ルカーシン (ペルミ)、アルビトマン (サラトフ)、オルロフ (モスクワ)、イサンガジン (オムスク)、チュルニク (ゴルロフカ)、ペロシスタヤ (ムルマンスク)、シードロヴィチ (レニングラード)、トカチューク (オデッサ)、ワフタンギシヴィリ (トビリシ)、リヴェンツェフ (クラスノダール)、シマコフ (ハバロフスク)、ハエス (ケメロヴォ)、シジューク (キエフ)、ピドレンコ (スタヴロポーリ)、ベレスニャヴィチュス (ヴィリニウス) であった。プロからの選出は 4 人で、ブグロフ、アルカージイ・ストルガツキイ、ミハイロフ、ゴプマンである。このほかに 7 人の事務方選出の代議員からなった⁽⁶³⁾。

だが、ヤクボフスキイによれば、当時必要と思われたこのソヴィエトもすぐに意義を失いつつあった。権力に近いところにいたコムソモールの幹部はトランポリンのようにソヴィエトを利用してビジネスの世界や金融機関に近づいていったと述懐している⁽⁶⁴⁾。

1989 年のアエリータでは、ВТО МПФ が刊行したアンソロジー «Румбы фантастики» に収められたメドヴェーデフの短編 «Протей» がストルガツキイ兄弟を誹謗中傷する悪質な作品であったため、ファンたちによる抗議運動が起こり、メドヴェーデフに見立てた熊の人形が逆さ吊りにされ、「唾を吐くための場所」と記された⁽⁶⁵⁾。この事件により、ВТО МПФ はファンたちの信用を失い、結成されたばかりの全ソ SF ファンクラブ会議から ВТО МПФ に対して公開質問状が送られたほか、セルゲイ・ベレジノイやボリス・ストルガツキイのセミナーの一員であったアンドレイ・イズマイロフから激しい批判を浴びた⁽⁶⁶⁾。

ファンとモロダヤ・グヴァルジヤ社との対決色は次第に鮮明になっていたが、ВТО МПФ に期待を寄せる作家も一部にはおり、シレツキイやディモフといった 80 年代前半に頭角を現した作家も取りこまれていった。ディモフは ВТО МПФ に近づいた 80 年代後半にボリス・ストルガツキイのセミナーを離れている⁽⁶⁷⁾。

一方でヤクボフスキイとザヴゴロドニイは 1989 年の春に東欧諸国を巡り、ソツツコンの開催を宣伝した⁽⁶⁸⁾。ソツツコンは社会主義国限定ではあるが、ソ連で初の国際的な SF コンヴェンションとして 1989 年の 9 月 3 日から 9 日にかけてウクライナのコブレヴォで開催された。参加者はソ連国内からは 52 の都市から 70 のクラブの 120 人が参加し、ほかにブル

63 Харламов И.Ю. Всесоюзная конференция КЛФ // Странник. Магнитогорск. 1988. № 1. С. 59-61 [http://fandom.rusf.ru/about_fan/fanzin_strannik88_1_10.htm].

64 «Мы не одни!».

65 «Мы не одни!».

66 メドヴェーデフの小説ではエフレーモフとストルガツキイ兄弟を思い起こさせるような登場人物が設定され、作中の発言として、1972 年のエフレーモフの死の直後に自宅捜索が入った事件はストルガツキイ兄弟の当局への密告が原因であると、全く根拠のない主張がされた。ベレジノイはストルガツキイ兄弟を誹謗中傷するような作品を掲載したピシチェンコらの倫理的な態度を問題とし、ВТО МПФ はファンが共に歩むべき相手なのかどうかを厳しく批判した。Бережной С.В. Сколько стоит фэн? // Андромеда. 1989 [http://barros.rusf.ru/article103.html]. また、イズマイロフはエフレーモフ未亡人や自宅捜索に関わった捜査担当者への聴き取りをおこない、メドヴェーデフの小説がいかに荒唐無稽であるかを強く批判した。Измайлов А.Н. Туманность // Нева. 1990. № 5. С. 179-188.

67 Бережной. Сколько стоит фэн? (前注 66 参照) .

68 «Мы не одни!».

ガリア、東ドイツ、ポーランド、ルーマニア、チェコスロヴァキアからも参加があった⁽⁶⁹⁾。

このように1980年代後半のロシアのSFファンダムは激動の様相を見せた。ファンたちは自分たちの求めているものがいったい何なのかをじっくりと考える余裕もなかったが、そのなかで明らかにファンと敵対する旧態依然としたモロダヤ・グヴァルジヤ社のやり方には反対し、コムソモールを動かすまでになった。一方で、コムソモールもファン活動の高まりに注目し、その力を利用しようと考えていたことがうかがえる⁽⁷⁰⁾。

3-6. 地方と中心

1980年代のロシアSFファンダムの活動を支えたファンクラブの地域性については非常に大きな特徴がある。それはファンクラブの活動の中心はモスクワやレニングラードといった大都市ではなく、ロストフ、スヴェルドロフスク、ヴォルゴグラード、ペルミ、ウラジオストク、ハバロフスクなどの著名な作家のいない都市が中心になっているということである。

ヤクボフスキによれば、モスクワにあったファンクラブは、ミハイル・コワリチュークが所属していたモスクワ国立大学のファンクラブとウラジーミル・オルロフが指導していた読書家協会のファンクラブ程度であり、活動もあまり活発ではなかったという。この理由をヤクボフスキは次のように説明している。

作家たちはそろっていた。今日はブリチョフ、明日はガンソフスキ、あさってもしあさっても、その次の日も…作家はやってきた。招待さえすれば…これは驚くべきことだが、モスクワでは先日の2001年のロスコンまで一度もコンヴェンションが開催されたことがなかった。ロストフ、スヴェルドロフスク、ウラジオストク、ユジノサハリンスク、キエフ、ニコラエフ、オデッサなど、どこでも開催していたというのに。コンヴェンションはしたかったが、モスクワでなくてもよかったのだ。言ってみればいい暮らしをしていたのだ。そんなにおもしろいならいくばくかの力を注いでみてもいいといった程度だ。何の問題があるというのだ？今日はグレチコ、明日はストルガツキだ。招待しないからといって何の問題があるというのだ？では、田舎のおれたちはどうしてしなければならないのだ？⁽⁷¹⁾

つまり、満たされていればファン活動の必要はないと指摘しているのである。地方のファン活動の原動力になっていたのが一種の「飢餓」であることがはっきりとわかる箇所である。

一方で、ペレストロイカの進展により非国営の出版社の設立が可能となったが、小説家のヴィタリイ・バベンコは1988年8月に協同組合の形式でモスクワのテキスト社を創設した。バベンコは1989年にブリチョフの作品集《Глубокоуважаемый микроб》を会社の最初の刊行物として出版し、SF叢書として「アリファ・ファンタスチカ」シリーズを立ち上げて

69 SOCCON-89 Итоговый документ [http://fandom.rusf.ru/convent/73/soccon_1989_7.htm].

70 ベレジノイは、全ソSFファンクラブ会議はコムソモール中央委員会の指導のもとに設立されたと当時から指摘している。Бережной. Сколько стоит фэн? (前注66参照)。

71 «Мы не одни!».

ストルガツキイ兄弟の「みにくい白鳥」を出版した。1991年からはストルガツキイ兄弟の全集を初めて刊行した⁽⁷²⁾。

1989年からリガでは複数の出版社をまたがる企画として「ノヴァヤ・ファンタスチカ」シリーズが開始され、ストルガツキイ兄弟の新作の長編《Отягощенные Злом, или Сорок лет спустя》、ストリャロフの作品集《Изгнание беса》のほか、1990年にはリュバコフの長編《Очаг на башне》、ラザルチュークの連作長編《Опоздавшие к лету》といった「第四の波」の作家を代表する作家たちの代表作が刊行された。「ノヴァヤ・ファンタスチカ」のシリーズは事実上、レニングラードのボリス・ストルガツキイと彼が主催していたセミナーの参加者たちが中心となっていたから、新しいSF出版社の波はモスクワとレニングラードという大都市から起きたことになる。地方都市というファンダムの基盤と新しい潮流の基盤とのずれが顕在化し始めたとも言える。

3-7. 出版事業への進出

ロストフのヤクボフスキイとビチュツキイは出版社を興すことは断念していたが、1989年1月の全ソSFファンクラブ会議での会合で「ファンタスチカ基金」《Фонд фантастики》の設立を議決し、運営に乗り出した。ビチュツキイは2年ほどクラブの活動からは離れていたが、この基金の事業はヤクボフスキイと共同して携わることになった。ほかにモスクワのファンであるアレクセイ・ケルジンにも協力を仰いだ。規約に書かれている事業は多岐にわたるが、主要な目的は一種の配本事業であった⁽⁷³⁾。すなわち、各クラブが出資者となって一人当たり約10ルーブルの出資金を「ファンタスチカ基金」に支払い、その資金で「ファンタスチカ基金」が出版社から本を買いつけ、各クラブに配送するというのが基本的な事業のあらましである⁽⁷⁴⁾。つまり、出版社と読者をつなぐ役割として、既存のクラブの連合体を活用して配本事業を整えたということになる。こうした事業が必要な背景として、地方都市のファンには従来から本当にほしい本がいきわたっていないという事情があった。

配本する本の選定は基金側が決めていたようである。初回の配本はアメリカのヘンリー・カッターの作品集であったが、ユジノサハリンスクで出版されたため、本を詰めこんだコンテナがロストフに届くという有様であった。実際の運営も整然としていたとは言いがたく、ビチュツキイのひらめきをヤクボフスキイがつぶすといった調子であったとビチュツキイが述べている。それでも、最盛時の本の買いつけは5万部に達し、それを1ヶ月でさばいていたという⁽⁷⁵⁾。

ヤクボフスキイとビチュツキイは1989年のアエリータで基金の事業を宣伝しようと考え、ヤクボフスキイがテキスト社から出たばかりのブリュチョフの作品集《Глубокоуважаемый микроб》を桁外れに大きな箱に詰めこんで鉄道に乗り、モスクワからスヴェルドロフスクへ

72 1989年当時のバベンコの意気込みについては以下も参照。Заря молодежи. Саратов, 29.7.1989. С. 8 [http://fandom.rusf.ru/convent/70/aelita_1989_5.htm].

73 規約については以下を参照。[http://fandom.rusf.ru/klf/fond_f_1.htm]

74 Иванов Г. Книги – почтой // Заветы Ильича. 23.9.1989. С. 4 [http://fandom.rusf.ru/klf/fond_f_2.htm].

75 «Мы не одни!».

向かった。一方、ビチュツキイとヤクボフスキイの妻のアンナはロストフからブルガーコフの作品集を段ボールに詰めて飛行機で運んだ。この構想はアエリータで熱狂的な歓迎をもって迎えられ、たまたま売りの近くにいたブリュチョフがファンたちにつかまってしまい、400人にサインをする羽目になった⁽⁷⁶⁾。ペルミのSFファンであるヴァチェスラフ・ザポリスキイによれば、ヤクボフスキイは資金が不足していたため、ストルガツキイ兄弟の新作の長編《Отягощенные Злом, или Сорок лет спустя》を買い付けることができなかったにもかかわらず、ファンたちに基金に加入するようにしきりに誘いかけ、「肝心なのは金だ！」と強調していたという⁽⁷⁷⁾。

しかし、ヤクボフスキイによれば、基金の事業は本の欠乏が解消されるにしたがい、その存在意義を失っていった。発足時から基金の運営は厳しかった。資金不足のために基金はファンが求める本を買い占めることはできなかったし、ファンにとっては前払いであるにもかかわらず、希望する本が必ず届く保証もないという点は根本的な問題であった。また、ソ連崩壊後には、郵便事情が悪化したことにより配本がうまくいかなかった。しかしなによりも、1991年以降は本の出版量が増えたことにより、同じ値段で地元の店で本が買えるようになり、基金の存在意義そのものが小さくなったのである⁽⁷⁸⁾。それでもヤクボフスキイたちはテキスト社から刊行されていたストルガツキイ兄弟の全集だけは最後まで基金の事業として配本し続けた。

3-8. 新しい時代へ

このようにしてヤクボフスキイたちの活動は規模と質の両面からも1990年頃にピークを迎えたが、活動の規模はもはや一地域のひとりのファンの行動の限界を超えていた。全ソSFファンクラブ会議においても、1990年にはアルビトマンやルカーシンが離れ、ケルジンとゴブマンくらいしか頼りになるメンバーはいなくなった。1992年には郵便事情の悪化のせいでウクライナやエストニアへは本が届かなくなった。1989年のソツツコンの開催時には必要であった全ソSFファンクラブ会議が1992年にはすでに不要になっていたとヤクボフスキイは語る⁽⁷⁹⁾。

SFのコンヴェンションにも変化が訪れた。80年代のソヴィエトSF界で中心的な役割を果たしたアエリータの時代が終わった。ヤクボフスキイがアエリータに参加したのは1992年が最後となった。また、ビチュツキイによれば、「ファンダム先のカンブリア紀の魂」であったブグロフは、いったいいま何が起きているのかまったくわからないとビチュツキイにこぼしたという。ビチュツキイはファンダムの輝かしい時代は1984年までであったと主張する⁽⁸⁰⁾。

アエリータに代わったのはサンクト・ペテルブルグで開催されるインタープレスコンで

76 «Мы не одни!».

77 *Алеф А. Аэлита-89 // Киборг в законе: Дайджест 3-х номеров. Волгоград: КЛФ «Ветер Времени»; ТОО «АТОМ». 1991. С. 7-9 [http://fandom.rusf.ru/convent/70/aelita_1989_14.htm].* アレフはザポリスキイのペンネームである。

78 «Мы не одни!».

79 «Мы не одни!».

80 «Мы не одни!».

あった。しかし、ヤクボフスキイやビチュツキイにとっては、インタープレスコンは勝手が違うようで、ビチュツキイは酔っ払って死体のように転がっているファンたちの姿を見て、子どもには見せられないと思ったとのことである⁽⁸¹⁾。

ヤクボフスキイたちは自分たちのくぐり抜けた時代をどうとらえているのか。ヤクボフスキイは次のように語る。

ペレストロイカと言われていたものはほんとうにペレストロイカだった。おれたちはほんとうにわかってなかった。おれたちはまったく別の国でまったく別のしきたりなどを身につけて暮らしているのだということ。クラブはただひとつのはけ口であることを静かにやめてしまっただけなのだ。あるものはビジネスに去り、あるものは国外へ去り、あるものはウォッカに、そしてまた別のものは仕事に、ほんとうに仕事についたのだ。⁽⁸²⁾

さらにその後の箇所でもこう語る。

人々はファンタスチカを読み続ける。だが、クラブは彼らにとってどういうものだろうか…おそらく、人々はクラブをすでに追い越したのだ。おれのような老いぼれた白髪の間人は子どものように会場で座っていることもできるかもしれない…そしてクラブは静かに息を引き取り始めていた。つまり人々は最初からひとつ会場を飛ばしてふたつめの会場へ行くのだ。おれのような人間にもまだ居場所があるととしても、どこでクラブを招集することができようか。⁽⁸³⁾

このような状況で、ヤクボフスキイのかつての仲間は子供向けのクラブを探し出し、そこに娘を通わせているという。だが、そこを訪れたヤクボフスキイは疲れ果てて出てきた。ヤクボフスキイは「スター・ウォーズ エピソード 6」も「トランスフォーマー」も見えていなかった。どんなにストルガツキイ兄弟を読んでいたとしても、いまや彼の出る幕はなかった。

おわりに

1980年代のロシア SF ファンダムの活動の構造については、以下のとおり整理することができる。ファン活動の原動力は、読みたい本の欠乏状態を各地との情報や出版物の交換で補おうとする意志であった。そして、各地域のファン活動は地域の読書家協会やコムソモール、あるいはその他の文化関係の行政機関等から活動費や会場などの物質的な支援を受けて営まれていた。行政当局との関係は一様ではなかったが、アルビトマンがザヴゴロドニイについて語った表現を借りれば、ファンたちは「力と可能性のかぎり」ファン運動を展開しようとしていたのであった⁽⁸⁴⁾。

81 «Мы не одни!».

82 «Мы не одни!».

83 «Мы не одни!».

84 *Арбитман*. Борис, который оказался прав (前注 50 参照) .

そのため、本がすぐに手に入ったり、作家と親しく交流したりできるモスクワやレニングラードではファンクラブの活動はさほど発展しなかった。それはそもそもファンクラブ活動の原動力となる「飢餓」の程度が比較的軽かったである。

ペレストロイカの進展により、ファンや作家の手で出版社が興せるようになると、状況は一変した。ファンたちは、コムソモールのような従来の組織に依存して活動を活性化させるのか、自分たちの手でまったく新しい活動の基盤を作り出すのかを迫られた。「モロダヤ・グヴァルジヤ」社の官僚主義、出版の私物化と競いながら、新しい出版社を支援していく試みがなされた。

だが、ソ連崩壊とともに、モロダヤ・グヴァルジヤ社の出版を支えていたシステムそのものが崩壊し、コムソモールや読書家協会といった1980年代のロシアSFファンダムを支えていた組織も力を失った。モスクワのテキスト社やサンクト・ペテルブルグのテラ・ファンタスタチカ社といったファンや作家たちが作った新興出版社が新しい潮流の作家の作品の出版を担ったが、これらの出版社は「若き親衛隊」社の官僚主義と闘う必要はなくなったものの、急速に氾濫し始めた英米SFの粗悪な翻訳などの本の洪水のなかでいかにして良質な本を出版し、読者の手に届けるかという問題に直面せざるをえなくなったのである⁽⁸⁵⁾。

そのときにヤクボフスキイやピチュツキイたちがなじんできた、ソヴィエト社会の各種組織の力を利用しながら活動を展開するという80年代のロシアSFファンダムの方法論は無力であった。さらに、方法論の問題以上に、ヤクボフスキイたちにとっては、本の洪水のなかでいかにして本を選び、ファンとしてSFを支えていくかという問題意識そのものが始めて直面する課題であった。ストルガツキイ兄弟の作品が読めるようになればそれで十分と考えていたファンもいたのである。ストルガツキイ兄弟以降の新しい潮流の作家やトールキンなどの翻訳作品はもはや理解と読書量の枠外という場合も見受けられたであろう⁽⁸⁶⁾。

このようにして1990年代のロシアSFファンダムは再編をしいられた。ファンダムの基盤はロストフやヴォルゴグラード、エカテリンブルグといった地方の都市ではなく、サンクト・ペテルブルグのように出版社とファン活動と作家の新しい潮流が緊密に連携する大都市へと移った。80年代末にファン活動を開始したチェルトコフやベレジノイは、テラ・ファ

85 翻訳の拙劣さを批判した評論としては以下のものを参照。自身も翻訳家であった筆者のボリス・ミロヴィドフは、作品が悪訳と省略によってゆがめられており、ベスター「虎よ！虎よ！」やル＝ゲウイン「ロカノンの惑星」については、身震いなしに読むことはできないと述べている。Миловидов Б.А. Субъективные заметки // Сизиф. 1990. № 2(10). С. 121-125 [http://fandom.rusf.ru/about_fan/milovidov_1_21.htm].

86 80年代のファンクラブは地域を基盤として成立していたが、1990年に創設されたストルガツキイ兄弟の作品のファングループである「Людены」は、精力的にストルガツキイ兄弟の作品の書誌を整理し、テキスト社が刊行した初のストルガツキイ兄弟全集の編集にも協力したほか、2000年からドネツクのスタルケル社が刊行した、目下もっとも信頼できるストルガツキイ兄弟全集の編集にあたってはテキストの厳密な校訂をおこない、さらに現在はストルガツキイ兄弟の作品の異稿集「Неизвестные Стругацкие」を精力的に刊行中である。「Людены」にはケルジン、ボリソフ、ユーリイ・フレイシマン、スヴェトラーナ・ボンダレンコ、ワジム・カザコフのほか、ヤクボフスキイも参加しており、80年代のファンはいわば心の故郷で自由に過ごすことができるようになったと言ふべきなのかもしれない。

ンタスチカの編集者となることでロシア SF の新しい潮流を支えたが、これはいわば、ファンダムのプロ化とも言える現象であり、ファンがアマチュア的なファンであり続けることはどうということなのかという問いがつねに突きつけられている⁽⁸⁷⁾。

しかし、新しい時代には新しい「飢餓」がある。商業主義的な出版が勢力を強めるなかで、ファンたちが興した出版社といえども自由に好きな作品を出版できるというわけではなく、本の氾濫のなかで本当に読者に届くべき作品が届いているかということがつねに問われるべき課題となった。これはロシアと同じように本の氾濫のなかに読者が放りこまれている日本においても共通する問題であり、大きく言えば、不特定多数に作品を送り出し、それを受け取るという行為自体につきまとう問題である。現代のロシアの SF ファンたちは、各地域ごとに開催される SF コンヴェンションで発表される各 SF 賞を通じて、ある種のメッセージを送り出しているといえるが、もちろんそれだけで問題が解決するわけではない。だが、この問題に正しい解答を出そうとする試みは、まったく別の話になるだろう⁽⁸⁸⁾。

87 テラ・ファンタスチカ社の編集者となり、プロ化したファンであるベレジノイがファンダムの死滅説に抗して、ニコラエフとともに 1994 年から発行したファンジン《Двести》は、テラ・ファンタスチカ社の支援も受け、プロ作家からの寄稿も数多い非常にレベルの高い雑誌であったが、もはやファンジンの範疇を超えていたと言えよう。《Двести》は 1996 年まで 7 号を刊行して終刊した。

88 ほぼ同じ認識をハルィムバッジヤが示している。ハルィムバッジヤは、いまでは本は店にあふれているのだから、本を探すために SF ファンがクラブへ行く必要はないと言う。問題は、どの本が読まれるべきで、どの本を心を痛めずに無視できるかという点であり、それをみきわめるためにクラブへ行く意味はあると主張している。*Халымбаджа*. Фантастический самиздат (前注 2 参照)。